

# 人間シラーを甦生させる人物史家ザフランスキー

Rüdiger Safranski: Schiller oder Die Erfindung des Deutschen Idealismus.

München und Wien 2004

長谷川悦朗

## 1. ジャーナリストによる評伝

2005年に没後200年を迎えたフリードリヒ・シラー（1759-1805）の46年に満たない短い生涯に捧げられた、全体の頁数が560、本文だけでも515頁に及ぶ浩瀚な評伝である。副題として「ドイツ観念主義の考案」が掲げられているが、読了後にはシラーの生涯がこの簡潔なフレーズでは集約され尽くせないものであったこととともに、この大著によっても物語り尽くせないものであったことがあらためて認識される。

ザフランスキーの著作はその多くが日本語でも翻訳出版されている。1945年南ドイツのロットヴァイルに生まれた文筆家にはすでに、E・T・A・ホフマン（1984年）、ショーペンハウアー（1987年）、ニーチェ（2000年）の評伝以外にも、「真理」（1990年）、「悪」（1997年）、「グローバル化」（2003年）を標題に掲げた著作がある。彼の考察対象は18世紀以降の近代ドイツの詩人作家、哲学思想家に幅広く及んでおり、シラーもその歴史的・文化的枠組みの中に位置づけられながら論究されてゆく。

本書はドイツ本国ではすでにベストセラー・リストに名を連ね、優れたシラー評伝として一定の評価を集めていたようである。専門研究者の側からは、誤りを伴う引用の多さや、冗長な語り口などが批判の対象となっているが、ジャーナリストによる評伝という前提の上で、その可能性と限界の両面を見出すことができるであろう。

## 2. 評伝記述の可能性

作家に対する評価は、同時代人たちによってすでに当人の存命中から開始されているものであるとしても、毀誉褒貶が激しい人物の評価は当人の死後に初めて説得力を増してくるものであろう。これに対して、シラーほどに生前から、さらに死後200年を経過してもその人格評価に大きな修正や転換が生じなかった作家は珍しいのではあるまいか。もっとも彼が生み出した作品自体には、とりわけ20世紀に相異なる政治体制によってその都度別の切り口で利用されてきた過去が存在する。しかし、その利用の仕方がいかなるものであれ背景には、高邁な理想を追求した詩人作家という不動のシラー像に対する絶大な信頼が常に存在していたように思われる。より正確に言うならば、生前の1790年頃から19世紀を通じて彼に対する崇拜は、ほとんど神格化にまで高まる一方であり、20世紀に突入して

彼とその著作を対象とする学術研究が本格化してからも、人間としての弱点、欠点を洗い出すことはあたかも禁忌であったかのようなのである。しかし、ザフランスキーが描出したシラー像は、それが禁忌であったというよりもむしろ、必然的帰結であったことを裏付けるものである。

1782年マンハイムにおける『群盗』初演の成功により劇作家として世間に認知され、不遇な環境にありながら歴史研究、美学理論構築によって歴史学者、哲学思想家としての地歩を確立し、ヴァイマルではゲーテとの共同作業を通じて詩人作家としての名声を不動のものとする、というのが作家シラーについて書き継がれてきた評伝のいわば正道であったし、ザフランスキーのそれも大筋ではこの路線から外れてはいない。その中から彼の独自性を指摘するならば、「作家」としての側面と同等かあるいはそれ以上に「人間」としての側面が深く掘り下げられている点であろう。プロローグにおいて「描写されるべきはシラーがいかに自らと向き合って修行していったのか、すなわちドラマと演出としての人生である。」(13頁)と明言されている。しかしながら、作家である以前に人間であるからには形而下の諸問題と無関係な生涯を送ることは不可能であり、作家の人生も純然たる内面ドラマではあり得ない。ザフランスキーはとりわけシラーの家計状況を赤裸々に記述しているが、それはとりもなおさず金銭問題が局面毎に彼の進路を左右していたからに他ならない。ここには、単発的な成功こそ収めていたにもかかわらず、ヴァイマルに安住の場所を見出すまでは、精神的にも物質的にも苦難と逆境が繰り返される人生を送っていた人間シラーが活写されているのである。

作家に対する評価、再評価、再々評価、という連鎖の中でシラーは半世紀毎に俎上に乗せられる存在のようである。それは生没年を基準とした記念年の間隔が四年である事情と深く関係している。西暦2005年前後から来るべき2009年にかけても半世紀周期で巡ってきた大掛かりなシラー回顧の契機となりつつある。半世紀前の没後150年から生誕200年にかけても数多のシラー関連書籍が出版されていた。当時刊行された研究文献として、例えばベンノ・フォン・ヴィーゼ、ゲルハルト・シュトルツ、エーミール・シュタイガーらの著作は長らくシラー研究の方向性を決定づけていた。その半世紀後に当る二十一世紀初頭に上梓されつつあるおびただしい数にのぼるシラー関連書籍のうちのひとつである、ザフランスキーによる評伝が今後どのように受容されてゆくのか、その行く末を予想するために、その中身を検討してみたい。

本書は24の章から構成されており、第1章は1759年の生誕で始まり、最終第24章は1805年の死没で終わるが、巻頭には全体を先導する「プロローグ」が置かれている。その冒頭はシラーの検死所見で始まっており、読者は何の前触れもなく唐突に、一個の物体と化した丸裸の生身の肉体と直面することとなる。ヴァイマル公爵家の霊廟内にゲーテと並んで安置されたシラーの棺台を望見し、その中に安眠しているはずの肉体を想定した経験のある者であれば、その迫真性もひときわであろう。しかし、この所見の中からとりわけ強調されるのは宮廷侍医が驚嘆している体内臓器の腐食ぶりであり、それゆえシラーにおいて肉体に対する「精神」の優位性、ひいてはその不滅が暗示され、読者は瞬く間にザフ

ランスキーの磁場へと引き込まれるのである。

プロローグには「精神」の他にも「観念論」、「自由」、「自然」等の、その後も繰り返し登場し、ひいてはシラーを読み解く上で不可避の鍵概念も初出している。しかし、このプロローグの意義は単に本編への導入にとどまらない。最終章まで読了した後で「エピローグ」の不在に物足りなさを感じてプロローグを再読した場合、最終第24章とプロローグとの整合性に気づくことになる。つまり、プロローグは同時にエピローグの機能も果たしているのであり、その時読者はすでにゆるやかな円環構造の中に巻き込まれるのである。

さらに、「24」という数字は一日の時間数を連想させるものであるが、各章の約20頁はまさしく約一時間ほどで読み終わるほどの分量である。全巻を中断なしに二十四時間で読破することに挑戦する人は稀であろうが、第24章までを読了した後でプロローグに立ち戻ることのできる構造は、一日の終りが同時に次の一日の始まりでもある連鎖の渦中に引き込まれたかのような錯覚を抱かせる可能性も開示している。

プロローグ後の24の章を通じて、伝記的事実の記述には編年体形式が貫かれている。しかし、伝記事実の単なる羅列であれば、本書は数十分の一の厚さで収まっているであろうし、実際に「年表」が11頁の分量にまとめられて巻末付録に収録されている。作家の評伝であるからには、そこには彼の作品や著書に対する解説や註釈が必然的に付随するものである。また、人物の独自性も他との比較において浮き彫りになるものであり、同時代人たちのエピソードも数多く挿入されるのが特徴的である。すでに引用した「ドラマと演出としての人生」を描写することが本書の目標のひとつであるならば、その主役はシラー本人であるとしても、彼の前に登場しては退場してゆく周辺人物たちの描出も不可欠である。父ヨハン・カスパール・シラーに始まり、父親に代わる存在となったヴェルテンブルク公爵カール・オイゲン、また、シューバルト、モーリッツ、ノヴァーリス、ヘルダーリンら同時代の作家たち、そして盟友ゲーテ、と枚挙にいとまがない。ただし、彼らのエピソードが挿入される際に、シラーを中心に回転していた時間軸が一時的に過去や未来の時代へと移動することがあるため、シラーの姿が霞んでほとんど見失われる箇所も散見されることは否めない。

周辺人物とのエピソードは作家としての公的活動に関わるものばかりではない。例えば、婚約成立時の逸話は人間シラーの私的領域の一端を垣間見させてくれる。彼は長年親密にしていたシャルロッテ・フォン・カルプに対して、別の女性と婚約したことをしばらく秘密にしていたために、何も知らない彼女に恥をかかせる事態を招来していたのである。このシャルロッテ・フォン・カルプは後年ジャン・パウルやヘルダーリンとも浮き名を流す女性であり、シラーとの一件も現代であれば、著名人が引き起こした醜聞としてマス・メディアの恰好の餌食になるところであろう。こうした私生活的一幕もまた、人間シラーを知る上での貴重な記録である。

### 3. 評伝記述の限界

本書は狭い意味での研究文献ではなく、あくまでも評伝であるが、それゆえその限界が露呈される箇所も散見される。そこで、いくつかの具体的事例を本書からの引用とともに紹介しておきたい。

シラーの著作からはつまみ食いの断片的な引用が行われるが、個々の作品について価値判断が下されるのはきわめて稀である。ほとんど唯一の例外は論文『スペイン支配からのオランダ連合軍離反の歴史』に対する評価であろう。「美しく気高い文体に関しては、ドイツではシラー以前にこうした文学的名人芸によって歴史が記述されたことはなかった。」(272頁)という讃辞が与えられる。シラー研究では哲学思想家としての側面と、詩人作家としての側面のいずれへの取り組みもさかんである一方、歴史論文の価値評価には困難が伴うが、散文作品としての文学性に注目した発言は興味深い事例である。

このようにシラーには詩人作家、哲学思想家、歴史学者としての側面の他にも、雑誌編集者、医師、翻訳家など多面的な顔があるが、戯曲、詩歌、哲学・美学書、歴史書、書簡はすべて同等の価値を有するかのよう無差別に引用されている。つまり、作品の形式や文体が問題とされることなく、その内容や実質がザフランスキー自身の前後の文脈に当てはまるかどうかという基準が優先されているのである。

さらに、記述されている行動記録の時点と、そこで引用された作品が執筆された時点とはおおそ照応するように配慮されてはいるものの、若年期から熟年期へと至るまでの約20年間に及んだ作家活動の枠組みにおける成長、発展は跡付けられていないに等しい。それは劇作家としての側面に焦点を合わせた時に顕著である。若年期の劇作活動に即して「ドラマとはシラーにとって情動惹起の芸術である、諸効果を名人芸におぜん立てできるかどうかすべてがかかっている。劇場とは、大きな感情を生成するための機械仕掛けである。」(119頁)と叙述される。シラーの悲劇理論の展開において、観客の「情動惹起」という目標はとりわけシュトゥルム・ウント・ドラング期の劇作品に適用される概念であるが、後年のヴァイマル古典主義期の劇作品では観客の「心の自由」という目標に比重が移動してゆく。ザフランスキーはこの問題に言及していないばかりでなく、別の箇所ではこの問題を別の文脈に移し替えている。しかも、その箇所では典拠が明示されないまま、牽強付会な引用が行われているのである。「(前略)以下の言葉で要約したあの理想に彼は近づいたのである。それは、激情からは解放されていること、常に明晰に、常に平靜に自らの周囲と内面を見つめること、随所に運命よりもむしろ偶然を見出すこと、悪意について怒り泣くよりもむしろ不整合について笑うことである。」(473頁)と引用されている箇所の出典は論文『素朴文学と情感文学について』の中で悲劇と喜劇を比較した一節であり、「喜劇の目標」として定式化されたものである。ザフランスキーの文脈とシラーの文脈との間には明白な齟齬が存在する。

最後に、副題として掲げられている「ドイツ観念主義の考案」にも言及しなければなら

ない。「ドイツ観念主義」という術語はカントを嚆矢とし、ヘーゲルへと至る哲学思潮と結びつけられるのが通例であり、ザフランスキーも明言している。「フィヒテ、シェリング、そしてヘーゲルが次々にこの地で教鞭をとることとなる。こうしてイエーナは最終的にドイツ観念主義の生誕地となるのである。」(308頁)すると、「考案、発明」を意味するドイツ語に込められたザフランスキーの意図が気になるところであるが、彼の真意は簡明直截には語られない。シラーが彼らの系譜に連なることに異論の余地はないが、「考案」をめぐる論議には物足りなさが残る。

#### 4. 人間シラーと人物史家ザフランスキー

すでに指摘したように、本書においてシラー作品に向けられたほとんど唯一の価値評価は歴史論文に対する讃辞であるが、そこにはザフランスキーの自意識も汲み取ることができる。人間シラーの46年の生涯を再構築することは一種の歴史記述の試みである。シラーの扱う歴史対象がほとんど全ヨーロッパ的広がり呈示しているのに対して、ザフランスキーはこれまでドイツ語圏の巨匠達を射程に見据えているが、歴史家としての偉大な先達シラーに対する表敬は、自らもその末裔に連なろうとする意識の表出であろう。本書はシラーの評伝でありながら、同時に彼を中心に据えたドイツ近代精神史記述として今後も読み継がれてゆくに値する一冊であろう。